Yamakado News Letter

山門水源の森を
次の世代に引き継ぐ会

ドローン空撮 守護岩上空から湿原を見下ろす 12/21

下層植生が全くない
守護岩周辺 12/21

種子散布まで残った
ササユリ 12/23

刈り取った下草を撤去する12/1

作業道開設作業 12/24

人が手をかければ多様性の豊かな森が戻る そんな手応えを感じた一年

沢山の入山者で賑わった紅葉シーズンも終わり、静かな森が戻ってきました。12月に入り、湿原対岸のコナラ林や標高の高い上層のブナ林は落葉して寒々しい姿になってしまいましたが、そんな中でも山歩きを楽しむ来訪者はチラホラおられます。コースから外れた場所で作業をしていても、森が静かだと遠くから熊鈴が鳴る音や話し声が風に流れて聞こえてきて、来訪者がいることがわかります。

今月は湿原沿いのササユリやミヤコアザミの防獣ネットを撤去した後の刈り込みと草の撤去、また作業道づくりを主に行いました。引き続ぐ会では2015年から野生動物管理という考え方を学び、保護すべき植生をネットなどで囲うなどの被害管理に加えて、シカの密度調査や捕獲など個体数管理にも取り組んできました。シカの頭数密度は減少傾向にあり、その効果がはっきりと現れています。湿原沿いではネットなどで保護された区画の外でも、一時は姿を消しかけた山野草などが食われずに花を咲かせ、また種を付けた状態でも残るようになってきました。食害圧が下がったことで、林床整備や下草刈りをすれば多様性の豊かな森が戻る、そんな手応えが感じられる１年でした。

しかしながら守護岩周辺など上層部では、ネットの外側は下層植生が全くない状態が続いています。今後はこうした標高の高い場所の植生回復をどのように行ってゆくかが課題になりそうです。

また、11月から本格的に作業に取り掛かった作業道作りは、12月も続いて作業を行いました。例年であればこの時期は雪が積もって作業ができないのですが、今年は良いのか悪いのか雪は全く降らず、年末まで作業ができました。

就労実践 終了

貴島俊史氏と前田壯一郎氏の2名が就労実践制度を利用し、8月1日からこの森で様々な保全作業に取り組んでくれましたが、12月26日でその事業が満了となりました。

夏の暑い時期はアカガシの除伐作業で生じた掛かり木の撤去処理。秋は紅葉に染まっていく森を眺めながら、コース上の老朽化した木橋の全面架け替え。そして四季の森のコース沿いの枯死アカマツ伐倒処理と伐倒木を利用したベンチ作り。冬は防寒着を着ながら作業道開設作業と、約５ヶ月にわたって様々な作業に取り組んでくれました。お陰で来訪者の皆さんがより安心して快適に散策できる森になりました。５ヶ月間、ありがとうございました。

急斜面での掛かり木撤去作業 8/13

沢道の老朽化した橋の架け替え 9/18

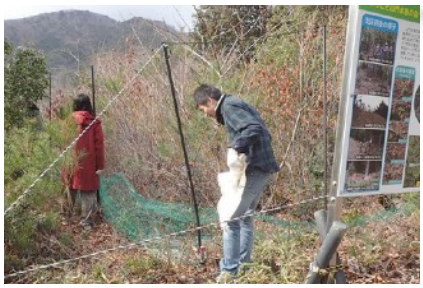
伐倒木を製材 10/24

仮置きしたベンチで休憩 10/26

作業道の路肩補強の木組み 11/21

作業道の今年の終了地点にて 12/25

滋賀県立大 インターンシップ


午後から老朽化したネットの撤収作業

作業を終えて

撤収物を背負子で担ぎ下山 Photo高橋

会員でもある滋賀県立大の高橋卓也先生を通じて、昨年よりインターンシップで学生にこの森の保全活動を体験してもらっています。今年は獣害対策の作業を体験しながら獣害への取り組みについて学ぶがテーマ。５月19日の下見には２名、作業日は12月21日の1日だけでしたが環境科学部の学生３名の参加がありました。

午前中は事務所でスライド資料を見ながら今までの獣害の経緯や取り組みについて学んでもらい、午後は湿原に上がり獣害対策の現場を見学。その後は一時間半ほど天然更新試験地のネット撤収作業をしてもらいました。作業後は学生からの質問に対応するなどし、学生さんにはレポートを書いてもらう予定です。

この森の自然そのものを次の世代に引き継いでいくのは勿論、この森の保全に関わる人間も次の世代に引き継いでいかなければなりません。しかしながら、どちらとも引き継ぎは課題も多く、簡単なことではありません。まずは若者にどう保全活動に関心を持ってもらうか、そうした考えでこの取り組みは始めています。自然環境について関心があり、それについて学びたいと考える学生さんには、是非実際の現場に触れる機会を多く持ってもらいたいと思います。

そして実際に自分が関わるとはどういうことか、そうした視点でものを考えてもらえれば…、先は長いですが次の世代に引き継がれるきっかけになるのではと考えています。

霧氷がついたソヨゴ 12/16